

平成二十九年度夏季

全国大学国語国文学会 第一一五回大会案内・要旨集

期日 六月三日（土）・四日（日）
会場 早稲田大学中央図書館併設・国際会議場・井深大記念ホール（二日目）
早稲田キャンパス11号館（二日目）

平成二十九年度夏季

全国大学国語国文学会 第一一五回大会^バ案内

○同封の葉書に出欠を^バ記入の上、五月二十五日（木）までに必ず到着するよう^バ返送下さい（^バ欠席の場合も必ず^バ返送をお願いいたします）。

○六月三日（土）の、昼食代（一、〇〇〇円／委員のみ）、懇親会費（一般・九、〇〇〇円、大学院生・六、〇〇〇円）、レジュメ資料代（一、〇〇〇円）、六月四日（日）の昼食代（一、〇〇〇円）は、同封の郵便振替用紙（口座名称／全国大学国語国文学会第一一五回大会、口座番号／〇〇一三一〇一七一八六三八〇）にて五月二十五日（木）までにお振り込み下さい。

○大会についてのお問い合わせは、左記の大会担当までお願ひいたします。

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田一—六—一

早稲田大学教育学部国語国文学科 石原千秋研究室
Eメール i-chiaki@waseda.jp

○出張依頼状が必要な方は、提出先の宛名と送り先を明記の上、左記の当学会事務局へお申し出ください。

〒102-8386 東京都千代田区三番町六番地一六
二松學舎大學 文學部国文学科 原研究室内

全国大学国語国文学会事務局

Eメール zenkoku.nishogakusha.h28to30@gmail.com
FAX ○一一一一六一—一四一四

第一日 六月三日（土）

早稲田大学中央図書館併設・国際会議場・井深大記念ホール

常任委員会（11時00分～11時45分） 早稲田大学中央図書館併設・国際会議場
委員会（11時45分～12時30分） 早稲田大学中央図書館併設・国際会議場

受付 12時30分～
開会 13時00分～

会場 早稲田大学中央図書館併設・国際会議場・井深大記念ホール

開会の辞
会長挨拶
会場校挨拶
総合司会／大東文化大学教授 藏中しのぶ
本学会会長・京都市立芸術大学名誉教授 中西 進
早稲田大学教育・総合科学学術院長 松本 直樹

公開シンポジウム（13時15分～17時00分）

テーマ 「小さい窓から文化を語る」

パネリスト

「ら抜き言葉と〈れれる言葉〉の拡大——日本語母語話者の〈誤用〉問題——」
「文学研究にできること——『文学・語学』編集長の経験と古典文学研究の立場から——」
「対抗文化としてのファンタジー——谷崎潤一郎『少年』における成長の拒否」
コーディネーター・司会

首都大学東京教授 浅川 哲也
早稲田大学非常勤講師 吉井美弥子
明治大学准教授 生方 智子
早稲田大学教授 石原 千秋

懇親会（18時00分～20時00分）

会場 リーガロイヤルホテル東京・二階・エメラルド（TEL〇三一五二八五一一一二二）
会費 一般・九、〇〇〇円 大学院生・六、〇〇〇円

第二日 六月四日（日）

早稲田キャンパス11号館5階

受付開始 9時00分～

研究発表会 『A会場』 会場 五〇二教室

午前の部 (9時20分～12時15分)

総合司会／大東文化大学教授

藏中しのぶ

『古事記』 天孫降臨神話における神話的世界の変質

発表者／鹿児島工業高等専門学校准教授

司会／群馬県立女子大学名誉教授

田中 智樹

「問ひ賜」 ふ天宇受壳神—『古事記』 天孫降臨段の誰何の場面をめぐって—

発表者／フェリス女学院大学大学院生

司会／群馬県立女子大学名誉教授

池田茉莉乃
北川 和秀

〈休憩〉

平安和歌における節氣と暦日意識—『賀茂保憲女集』『源重之女集』を契機に—

発表者／國學院大學兼任講師

司会／日本女子大学教授

渦巻 恵

高野 晴代

『和泉式部日記』 十一月記事に見られる古歌贈答の意味

発表者／國學院大學大学院生

司会／愛知淑徳大学教授

副島 和泉
久保 朝孝

研究発表会『B会場』

会場 五〇三教室

午前の部（9時20分～12時15分）

総合司会／奈良大学教授

上野 誠

明治期の自己表象小説における文末表現と三人称——徳田秋聲による自己を語る文体の探求

発表者／名古屋大学大学院生

安井 海洋

司会／フェリス女学院大学教授

佐藤 裕子

内向化する「文学者」——『野分』における演説と述作の有り様——

発表者／二松學舎大学SRF研究助手

阿部 和正

司会／フェリス女学院大学教授

佐藤 裕子

谷崎潤一郎「青い花」論——大正時代の装いに注目して——

発表者／明治大学大学院生

木村 愛美

司会／専修大学教授

山口 政幸

池宮城穂宝「奥間巡查」論

発表者／東海大学大学院生
司会／専修大学教授

小河 淳寛
山口 政幸

昼食・休憩（12時15分～13時15分）

研究発表会『B会場』 会場 五〇三教室

午後の部 (13時15分～15時15分)

志賀直哉の回想という方法——「憶ひ出した事」にみる「私」の差異化——

発表者／明治大学大学院生

司会／國立館大学准教授

柳澤 広識
平 浩一

電話網の拡大による社会的空間の変容——中上健次『十九歳の地図』、『十九歳のジェイコブ』における脅迫電話——

発表者／名古屋大学大学院生

司会／大阪樟蔭女子大学教授

黒田 翔大
奈良崎英穂

中上健次『地の果て 至上の時』論 —「路地跡」による「路地」の発見—

発表者／中京大学非常勤講師

司会／大阪樟蔭女子大学教授

佐藤 綾佳

奈良崎英穂

総会・授賞式『B会場』(15時20分～16時20分) B会場 五〇三教室

・総会

・授賞式(学会賞／文学・語学賞／研究発表奨励賞)

・閉会の辞 本大会実行委員長

早稲田大学教授

石原 千秋

平成二十九年度夏季

全国大学国語国文学会第一一五回大会公開シンポジウム

テーマ 「小さい窓から文化を語る」

文学研究や日本語研究も細分化して、同じ専門でも他ジャンルや他作品の研究はわかりにくくなっています。たしかに、おなじジャンルの研究者同士でさえ、その研究の意義がわからないことがあるのが現実です。ある年配の研究者は「高度に専門的な特殊研究」を「独善的」とさえ述べて、人文学を挑発しています。この挑発に乗らない手はありません。

いま科学技術の発展によって、私たちが望むことなら、良いことでも悪いことでも、ほぼ何でもかないそうに思います。その意味を考え、何をやってもよいわけではないと立ち止まらせるのも、世の中を変えていくのも、文化の仕事です。たとえば、臓器移植のために人間の「死」を法律で定義しようとしたとき、その法案を提出した政党は、投票に当たつて党議拘束をかけませんでした。「死生観は最終的には個人の問題だ」というのがその理由でした。政治が医学の問題を文化にゆだねた瞬間でした。これはとてもはつきりした例ですが、こういうことの連続が、私たちの日常だと言つてもいいでしょう。

しかし、それは見えにくいものですし、ましてや人文学が私たちの文化にどのように関わっているのかは、一般の方にはほとんど見えません。そこで、できる限り小さく専門的な問題設定をして、その研究の意義を他の時代の専門家（できれば一般の方にも）にもわかる言葉で語る試みからはじめてはどうでしょうか。私たちの世界の形を決めているのは文化なのだと、高らかに宣言するためです。

公開シンポジウム（14時30分～17時00分）

パネリスト

「ら抜き言葉と〈れれる言葉〉の拡大——日本語母語話者の〈誤用〉問題——」

首都大学東京教授 浅川 哲也

「文学研究にできること——『文学・語学』編集長の経験と古典文学研究の立場から——」

早稲田大学非常勤講師 吉井美弥子

「対抗文化としてのファンタジー——谷崎潤一郎『少年』における成長の拒否」

明治大学准教授 生方 智子

コーディネーター・司会

早稲田大学教授 石原 千秋

平成二十九年度夏季

全国大学国語国文学会 第一回五回大会 研究発表会

【研究発表会／A会場 午前】

『古事記』天孫降臨神話における神話的世界の変質

鹿児島工業高等専門学校准教授 田中 智樹

『古事記』の天孫降臨神話は天照大御神の言葉から始まる。司令神の発話部分は物語に新たな展開をもたらす構造上の要であり、特に『古事記』において特徴的に用いられる「命以」「詔」「言依（因）」「意向（趣）」などの用語解釈を中心に、文章の構造が明らかにされ、読解が深められてきた。先行研究により高天原を主体とする葦原中国の秩序化の構造と、天照大御神を高天原の主宰神として確立しようとする『古事記』の構想が明らかにされてきたが、本発表ではその発話の内容を考察の対象とする。

天神による発話内容は概ね二つと考えられる。一つは、葦原中國は天孫が領有支配する世界であることを宣言する内容であり、これは天忍穗耳命、迹迹芸命の天降りを導く。もう一つは、混乱する葦原中国を意向（趣）ける神を選び出す内容であり、これは天菩比神、天若日子、鳴女、建御雷之男神の派遣を導く。この様に高天原と葦原中国の対立構造において発せられる内容

が、高天原と葦原中国という神話的世界間の移動に関する指令である点に注目する。二つの世界をつなげ、互いの関係を表す存在として移動する神を捉え、移動表現とその形態（用語、目的、手段）を抽出分類し、当該神話で建御雷之男神の派遣や迹迹芸命の天降りが完遂される場合とそれ以外の表現との違いを明らかにし、ここから高天原—葦原中国の段階的な秩序化を指摘する。

また一方で、天若日子の死に際し、父神天國玉神と妻子とが高天原から降下する物語が記載される。これは天照大御神の指令による降下とは考えられず、死を悲しむ個人的な感情に基づく移動と捉えられる。一連の物語において異なる移動形態が語られていることになるが、これは高天原—葦原中国の変化する関係性において位置づけることができる。つまり感情に基づく世界間の移動とそこから展開する物語とによつて、秩序立てられた高天原—葦原中国の関係性が補強されるのである。

「問ひ賜」ふ天宇受壳神

—『古事記』天孫降臨段の誰何の場面をめぐつて—

フェリス女学院大学大学院生 池田茉莉乃

本発表は、『古事記』天孫降臨段において誰何によって猿田毘古の名を頤わす天宇受壳を対象として、その機能と性質を『古事記』というテキストに即して考察するものである。

従来の研究において当該神話が論じられる際には、『日本書紀』一書第一の記述がその解釈のために取り上げられる傾向にあり、

天宇受売の機能・性質は、その眼力や笑い、あるいは衣服を肌蹴させる行為などの呪的性質によって解かれることが多い。

しかし、『古事記』当該神話においては「面勝」という表記は

あるものの眼力が直接語られることはなく、笑う行為や衣服を肌蹴させるという行為に至っては記述が一切ない。ここに『日本書

紀』の記述を持ち込むことは、両テキストの質や神話の内容の差異を捨象することにもなりかねない。『古事記』における天宇受売の性質を捉えるためには、これらが記されない『古事記』固有の文脈の中での説明が必要となるであろう。

そのような視座に立つとき、当該場面の『古事記』における特殊性という点で注目したいのが、『古事記』において一貫して敬語が使用されない天宇受売に対し、当該の誰何のことばを発する場合に限って「問賜」という敬語が使用されている点である。

そこで、本発表では、この表現に焦点を当て、『古事記』における「賜」、とりわけ「問賜」の用例を検証することとした。

『古事記』における補助動詞「賜」の表記は、地の文では基本的に天照大御神とその子孫たる天皇に専ら用いられるものであるが、その例外にあたるのが、天照大御神の問い合わせの言葉を一人称で繰り返す当該の誰何の場面と、同じく天照の問い合わせを建御雷神が事代主神に対して繰り返す場面の二ヶ所である。両者の共通点・相違点の比較によって、当該神話の天宇受売の誰何のありかたが、天照大御神の「命||御言」が絶対的な力を持つ『古事記』独自の理論の中で形づくられたものであることを明らかにしたい。

平安和歌における節氣と暦日意識

—『賀茂保憲女集』『源重之女集』を契機に—

國學院大學兼任講師 潟巻 恵

『古今集』の冒頭歌「年内立春」詠が、十二月の歌でありながら春部に置かれたのは、暦日意識より「立春」という節氣を優先したためである。春部卷末には、「三月晦日」の詞書を持つ二首の後に、「亭子院の歌合の春の果ての歌」として躬恒の歌が加えられている。一方、秋部末尾においては、「秋の果つる心」を詠む歌のあとに「長月晦日」の詞書を持つ二首が配される。末尾歌「道知らばたづねも行かむもみぢ葉を幣とたむけて秋は去にけり」について、田中新一『平安朝文学に見る二元的四季觀』（風間書房一九九〇）は、「秋は去にけり」とあるから、本来は冬部に入るところ、立冬が九月中だったのを秋部卷末歌になつたと解し、「春部・秋部の卷末に共通する、撰者の心に揺れる二元觀を見ることができる」と指摘する。しかし、十二月立春詠を春部の歌とするなら、この歌は、冬部に入れるべきではないか。

「年内立春」は、『高遠集』では、月次歌の十二月に詠まれ、『麗花集』に入集する中務歌も冬部に配される。また、初期百首のひとつ「源順百首」でも冬部に詠まれ、後の「永久百首」においても「旧年立春」という題が冬部末尾に置かれている。

初期百首の流れを受ける『賀茂保憲女集』は、暦博士、天文博士を歴任した保憲の娘の集であり、すでに久保木寿子『賀茂保憲女集試論—初期百首と暦的觀念』（文学・語学147 1995・8）において、『周易』や『礼記』「月令」などの影響を受けていることが論じられている。「源重之女百首」においては、古今歌

のようすに節氣と暦日のずれを詠む歌が、四季の部立ての変わり目に配される。そこで、平安和歌における節氣と暦日意識について、用例を検討しつつ、愚考を呈したい。

【研究発表会／B会場 午前】

明治期の自己表象小説における文末表現と三人称

—徳田秋聲による自己を語る文体の探求—

名古屋大学大学院生 安井 海洋

明治四〇年前後より勃興する自然主義文学運動では、作家自身の体験を主題とする作品、すなわち自己表象の小説が書かれた。この流派の一人である徳田秋聲もまた自らの妻との結婚と出産を描く『徳』（明治四四年）を発表するが、これらの作品はその殆どが文末辞をタとするタ形の文体で書かれている。野口武彦によれば、明治二〇年代に二葉亭四迷らが文末表現にタをとり入れたことで、小説の言語は「三人称客観描写」を可能にしたといふ（『三人称の発見まで』）。秋聲を含む自然主義作家たちが用いるタ形の文体は二葉亭のものを発展させたものであるが、一般に主觀性が出やすいと思われる自己の体験を、対象の客観的な描写に特化するタ形の文体で描くことは、言文一致が未だ完成しない明治四〇年代の作家にとってはある種の困難を伴う作業だった。

ところで、自然主義が起ころる以前より、高浜虚子をはじめとする写生文派は一人称ル形による作品を発表していた。従来の研究で、この文体は書き手の見聞した事象を克明に写生するために採

択されたものだと論じられている。虚子と秋聲との間に影響関係があることは相馬庸郎らによって指摘されてきたが（『日本自然主義再考』）、その秋聲は自己表象に際し、写生文の一人称ル形をあえて用い、三人称タ形を選んだ。大正期における一人称タ形の「私小説」の流行が示すように、三人称よりも一人称のほうが書き手の内面を描くのにふさわしいという印象を与える。しかし明治期の秋聲にあっては、一人称と「客観描写」の文末辞タとは矛盾する組み合わせであった。よって彼は自らの体験を語る文体として三人称タ形を採用したのである。本発表では『徳』などの自己表象小説を対象に、秋聲が確立した三人称タ形の文体による自己表象の方法の内実を、写生文との比較を通じて明らかにする。その際、言語学の分野における話者の視点とモダリティに関する研究成果を作品分析に援用する。

内向化する「文学者」

—『野分』における演説と述作の有り様—

二松學舎大学SRF研究助手 阿部 和正

『野分』（一九〇七年）の主人公の一人であり、「文学者」と規定される白井道也は、人々に道徳を説き、彼らを感化するための書、「人格論」を執筆する。「人格論」だけでなく道也は、雑誌に「解脱と拘泥」という論説を書き、また「現代の青年に告ぐ」と題した演説も行う。『野分』のもう一人の主人公といえる高柳周作は、道也の論説や演説によつて感化され、自分を道也の「弟子」

だと位置付けていく。これまでの研究では、高柳が感化される道也の著述と演説が同一視され、「人格論」をなすのだとされた。けれども、内容はともかく、著述と演説は、本来相手へ主張

を伝える方法が異なるものである。

たとえば、漱石が東京帝国大学生であった当時の主張では、演

説は西洋固有の文化とされ、演説を練習することの必要性が説かれていた。そして演説の上達が、漢文的な文章を脱却する契機になるとされ、言文一致をなすために必要なものなのだと主張された。

本発表では、道也の演説「現代青年に告ぐ」と述作「人格論」を切り離し考察することを通して、「野分」の再解釈を試みる。そこから見えてくるのは、書くことよりも語ることが重視され、語った内容ではなく、語る人物の「人格」によって感化されていく青年の有り様である。青年を感化するような演説を行う道也は、教師としての挫折を経たのち、人々に働きかける手段として書くことを選択していく。一方、感化される青年たちは、大学卒業後すぐに書くことによって世に出ようとするのである。世代による「文学者」認識の変遷を通して、「演説」と「論説」が変容をよぎなくされたジャンルであつたことを浮かび上がらせる。加えて、漱石作品内における「文学」が、個人の内面を描くものへと傾き、内向化していく過程も明らかにしたい。

谷崎潤一郎「青い花」論 —大正時代の装いに注目して—

明治大学大学院生 木村 愛美

谷崎潤一郎の作品史を見渡したとき、大正時代を暗黒時代と例えることがある。本発表で取り上げる「青い花」『改造』大正十一年男性の岡田がエキゾチックな阿具里に洋服を買い与えるために横浜へ向かうという内容で、目を引くような事件は何一つ起らない。そのためか、これまでには「痴人の愛」へと繋がるスプリングボードとしての一作品と位置づけられ、作品内部に切り込むような研究はほとんど無かつた。そこで本発表では、阿具里の装いの変化の過程に注目し、当時の新聞、雑誌記事を手掛かりにして、岡田が阿具里に洋服を買い与えるというストーリーがどのように解釈できるのか考察した。当時、女性は身分や年齢などで装いを変えるべきだという江戸時代からの風習が根強く残っていた。しかし、同時に、百貨店のカタログや女性雑誌によつて流行の装いが巷に広まり、身分や境遇を気にせずにファッショントレンドを通じて、女性は装いによつて身分から解放され、変身することが容易に出来るようになつていつた。岡田はそれを利用し、貧しい生まれの阿具里に洋服を着せることで、理想の女性の影像を現実の世界に創りあげようと考える。そして、洋服を「いれずみ文身の一種」と見なし、阿具里にそれを纏わせようとするが、それが成功に近づくほど眩暈を感じ、痩せ衰えていく。その姿は、『刺青』の彫師・清吉が「女」を変身させるために、自ら肥料と

なつて刺青を彫る姿と重ね合わせることができる。ここから、谷崎は、本作において、装いの混乱期をうまく利用し、モチーフを刺青から装いに変えて、「変身」というテーマを深めようとしたと結論付けた。

池宮城積宝「奥間巡査」論

東海大学大学院生 小河 淳寛

池宮城積宝「奥間巡査」(『解放』大正一一年十月号)は「沖縄文学」史において、大正期の小説の代表的な作品と見なされる短編である。小説の「始まり」とされる山城正忠「九年母」(『ホトギス』明治四四年六月号)がその文学史的な観点からの重視に留まり、作品としての注目が行われていないのと同様、本作に対する言及は、「九年母」にはまだ数稿存在していたのに對し、ほぼ存在しない。そもそも、「沖縄文学」史において大正年間は同人誌や雑誌の創刊などは頻繁に行われたが、資料の大半が焼失し、現在では記録のみしか残っておらず、作品自体の残存が極めて少ない。そこで本発表による言及をこの空白期を埋める試みにすると共に、「奥間巡査」という作品 자체に言及することを目的とした。

物語の内容は、那覇市の特殊部落「△△屋敷」の住人から初めて巡査になつた奥間百歳という若者が、職務への義務感からくる部落への敵意と恥、他県出身者が大半の警察組織の中での疎外感と板挟みになる。そのような日々の合間に、ある娼妓と出会い相

愛関係になるが、偶然その兄を義務感から逮捕したことで自らの行いを強く悔恨するというものである。

作品で注目するのは、特殊部落、警察、辻遊廓という場と立場をめぐる奥間百歳の主体性の問題である。作品序盤では「彼自身と家族と部落の人々の念願」と、ほぼ一丸の存在とされていたのが、百歳が巡査となり、部落から異端視されるようになると「百歳の家の存在をさへ呪はし」い対象とされ、家ごと排除される。警察同僚とも互いに「異邦人視」した百歳が初めて訪れた辻遊廓での遊女との関係は一見すると相愛関係だが、彼らが互いに愛情を抱いていると「思われる」とされ、彼らが「二人」と扱われるには干ばつ続きで百歳以外の客足が女から遠のき、さらに暴風雨によつて三日三晩共に過ごした状況に起因してである。つまり、どこまでも百歳は部落民という立場、巡査という立場、辻の客という立場によつて行動が左右されていた非主体的な存在ということが見えてくる。

女と三日三晩過した翌日に偶然男を捕まえる際には「巡査としての職業的人間」に支配され、その男が遊女の兄であることを知つて悔恨した百歳は最後まで非主体的な存在である。だが、最後に彼が見せる「陥罪に陥ちた野獸の恐怖と憤怒」からは、彼が自らの非主体性を感知した可能性を読み得ることができる。個人の非主体的な表現と、個人がいかにそれに気づき得るかの可能性を本作からは読むことができる。それは先行する「九年母」と比較した場合、非個人的な「群衆」の表現に徹底していた「九年母」に対し、個人の立場から非個人的な要素に立ち向かおうとした意向を見ることができるだろう。

【研究発表会／B会場 午後】

志賀直哉の回想という方法

—「憶ひ出した事」にみる「私」の差異化—

明治大学大学院生 柳澤 広識

志賀直哉の「憶ひ出した事」(『白樺』、明治四十五年一月)は、祖父直道が拘留された相馬事件の記憶を扱った小説である。直哉は「祖母の為に」(『白樺』、明治四十五年一月)から自伝的な作品を連続して発表するのであるが、本作は「母の死と新しい母」(『朱鸞』、明治四十五年一月)とともに発表されており、ともに幼少期を描いているものである。本作では、「雪の夜」という悲劇を鑑賞している「私」が、その劇の内容から過去の出来事を回想するという形式が採用されている。「母の死と新しい母」と比較すると、これまでに多くの論考がなされてきたとは言い難い。しかし、直哉の祖父直道への言及を鑑みると、本作は軽視すべき作品ではないと言える。

本発表では、回想という形式によつて直哉がどのように「私」を語つているのかに着目したい。自己およびその周囲を作品化する際に、どのような手法が用いられているのかを検証する。主に次の三点について考察するものである。

その第一は、「雪の夜」への批判から、その作者である佐藤紅緑への批判を考察する。佐藤紅緑は、同じく作中で批判されいる『萬朝報』と関係づけられる。大衆の関心を集めることへの直哉の批判を本作に見出し、それが作品形式(子どもの視点での回想)にも関連することを示す。また、その第二として、明治四十

四年十二月の帝国劇場演目を確認することで、枠部分の情報が事実であり、誰にでも得られる情報と混合することで回想部分のリアリティが強められていることを指摘する。回想部分には、事実と異なる情報が提示されている可能性があり、その提示の方法は巧妙なものであると考えられる。最後に、作中人物が二分されてしまうことを指摘し、相馬事件の記憶の有無が他の人物から「私」を差異化する要因となつていてそれを考察する。以上を通じて、志賀直哉が「私」をどのように差異化して語っているのかを明らかにするものである。

電話網の拡大による社会的空間の変容

—中上健次『十九歳の地図』、
『十九歳のジェイコブ』における脅迫電話—

名古屋大学大学院生 黒田 翔大

一九七〇年代は、家庭における電話の普及が拡大する時期であった。その少し前から公衆電話も大きく普及が進んでおり、家庭や街中に電話が偏在する状況が形成されつつあった。電子メディアは物理的場所とそれが本来持つている社会性を分離させるが、電話の普及はあらゆるもの内外との境界を揺るがす。そのような当時の状況が、中上健次の『十九歳の地図』や『十九歳のジェイコブ』の背景として存在しているのである。本発表では、電話に焦点を当てて両作品を検討すると同時に、電話網の拡大による社会的空間の変容の一端を明らかにすることを目的とする。

『十九歳の地図』（一九七三年に『文藝』に掲載）と『十九歳のジエイコブ』（一九七八年から一九八〇年にかけて『焼けた眼、熱い喉』という原題で『野生時代』に掲載）の両作品では、各主人公が脅迫電話を掛けるという行為が描かれている。中上は「現代小説の方法」と題する連続講座の中で、電話は「小説を阻害する一つの形だと思うんです」と言及している。これは電話が正しい目的で使用されているのであれば、小説において有機的な機能が難しくなるということを意味している。しかし、両作品に描かれてているのは、本来の電話の使用法からすると明らかな逸脱である。ここには、電話が人々に与える影響が示唆されていると考えられる。

本発表では、初めに中上作品における電話の描写に触れた後、当時の公衆電話や家庭用電話といった電話によるネットワークが拡大していく状況を確認していく。そして『十九歳の地図』の主人公と脅迫電話の関わりの検討を行い、『十九歳のジエイコブ』の父殺しの問題へと接続させていく。それによって、当時の拡大する電話網に伴う社会的空間の変容を明らかにしていく。

中上健次『地の果て　至上の時』論

—「路地跡」による「路地」の発見—

中京大学非常勤講師

佐藤 綾佳

『地の果て　至上の時』では、初めて「路地」の外からの視点を踏まえて「路地」が描かれる。その点で、本作は「路地」を考

える上で非常に重要な作品と言えよう。そして、本作は「路地」の本質を露わにする「路地跡」に加え、「父殺し」「水の信心」という三つの要素が、互いに影響し合い、複雑に絡み合いながら構成されている。

前作『枯木灘』終盤、異母弟を殺害した秋幸は、三年の刑期を終了し、新宮へと戻つて来る。そこで眼にしたのは、土地改造によって、家々が壊され裏山が削り取られ更地と化した「路地」だった。新宮の中心に「路地」の死体のように横たわっている「路地跡」は、元「路地」の住人・ヨシ兄を筆頭に浮浪者らの巣窟となってしまっている。「路地」が消滅したからこそ、「路地」と外部との境界が取り払われ、これまで聞こえなかつた「路地」の外の者の「路地」に対する声が顕在化する。

さらに、秋幸と龍造との接近が描かれている点も見逃せない。秋幸は龍造の元へと身を寄せた結果、これまで想像していた龍造と目の当たりにした彼との相違に気づく。「蠅の糞」と龍造を呼び、悪の限りを尽くした男と尊したことで、「路地」の者やフサは彼の別の一面を隠蔽していたのだ。このような出来事を通して秋幸は、これまで気付くことのなかつた「路地」というトボスの真の姿を改めて知るのである。

そして、『枯木灘』終盤から本作の第三章序盤までの秋幸の経験は龍造のそれと奇妙なほど重なる。秋幸がこの二人の近似を打ち破り、「父殺し」の成功を保証するトボスこそが「路地跡」ではないだろうか。そこで、本発表では、「路地跡」によって明らかとなる路地の閉鎖性に注目し、『岬』『枯木灘』では描かれることのなかつた「路地」の本質を明らかにしつつ、本作における「路地跡」の持つ意味を考察していく。

会場案内

六月三日（土） 第一日

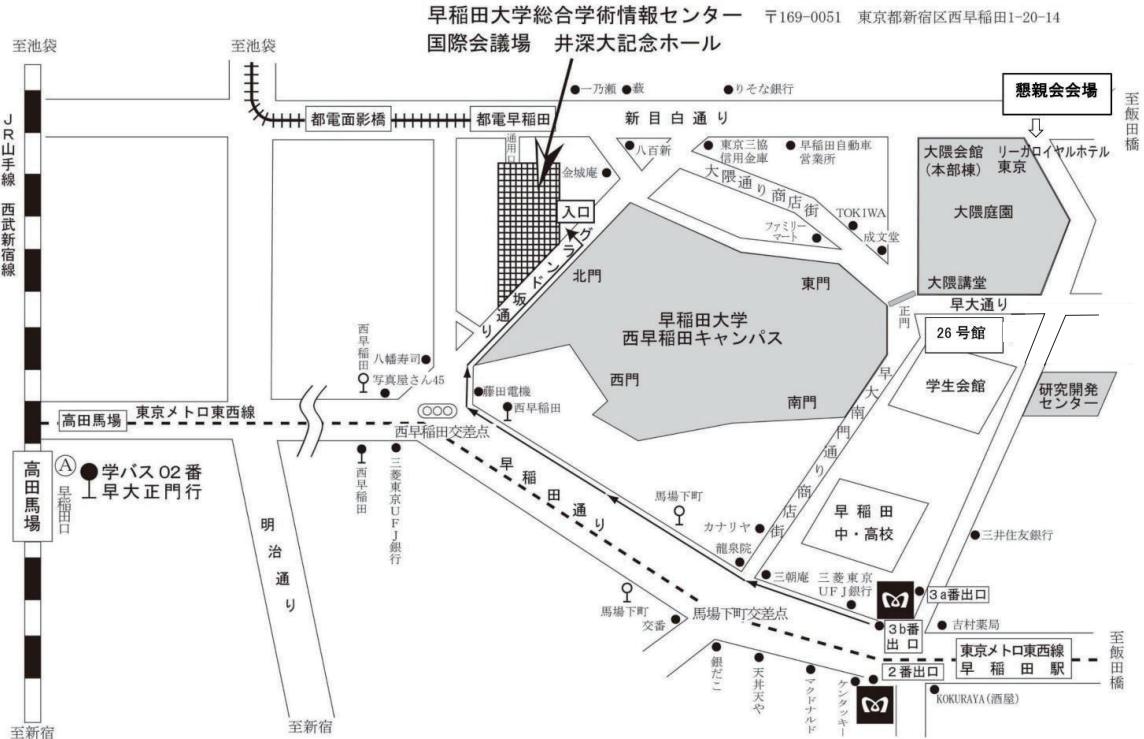
会場 早稲田大学国際会議場・井深大記念ホール
(早稲田大学中央図書館併設)

懇親会会場 リーガロイヤルホテル東京・2階・エメラルド

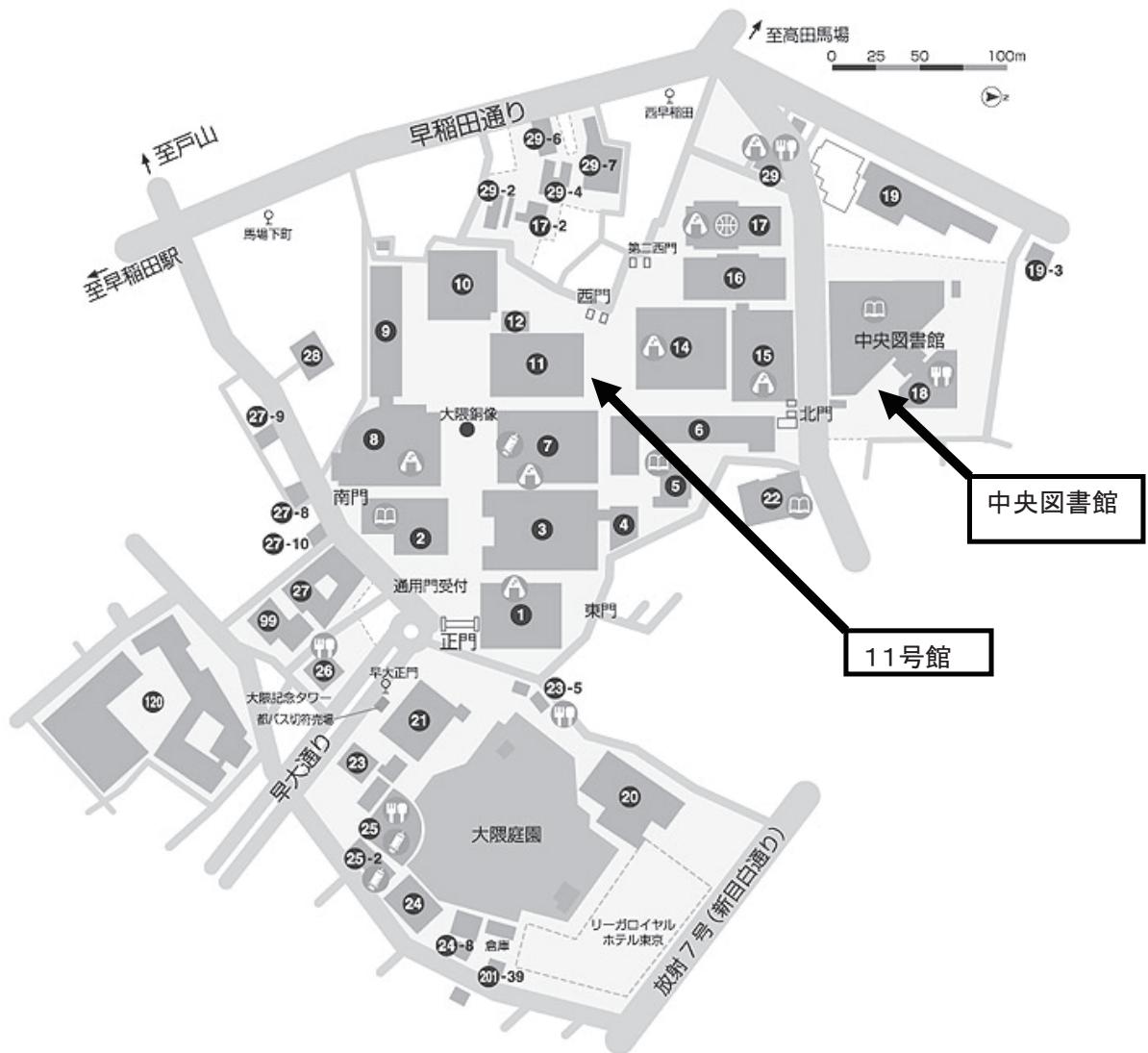
六月四日（日） 第二日

会場 早稲田大学早稲田キャンパス 11号館

A会場 502 教室 B会場 503 教室



〈早稲田大学早稲田キャンパス案内図〉



ショップ

体育館

図書館

食堂

保健センター

■所在地

169-8050 新宿区西早稲田 1-6-1

■アクセスルート

- ◇JR山手線 (高田馬場駅 徒歩約 20 分)
- ◇西武新宿線 (高田馬場駅 徒歩約 20 分)
- ◇地下鉄東西線 (早稲田駅 徒歩約 5 分)
- ◇地下鉄副都心線 (西早稲田駅 徒歩 17 分)
- ◇都バス (高田馬場駅 - 西早稲田、または、早大正門)
(早稲田駅 徒歩約 5 分)
- ◇都電荒川線